

# 未来に残したいもの 伝えたいもの

## 第2回 ともに輝く男と女—しなやかに気品溢れる女たち

荘銀総合研究所 研究顧問 東山 昭子

全体としては暖冬でしのぎやすい冬だったとはいえ、時折にくる大雪と寒波は、さすが北国の冬を感じる厳しさであった。寒さに遇わなければ咲かない桜も、例年より一段と早い開花である。四季の巡りの健やかさのなかで、雪と寒さに耐えて力を満たし、草木も大地も人も、いのち輝く春を迎えている。

大学を卒業して鶴岡に赴任した当初、御家中と呼ばれるかつての上級藩士の家に下宿した。その厳しい静かさは閉塞感そのものであり、闘わなければならない城下町の古い体質と思えた。たまに仲間と遊びに出る酒田の開放感は底抜けであった。爾来五十年を鶴岡で過ごし、伝統を大切にしながら時代の流れを受け入れ、進取の気風とバランスを保つ鶴岡の風土性を、この上もないものと受け入れている自分に驚くことがある。

鶴岡で最初に共感したのは、田澤稲舟が描く「世の中の当り前」に徹底して抵抗する女主人公の激しさと鋭さであった。しかし、私が奉職した女学校で出会う生徒や親たちは、横光利一の「夜の靴」に描かれるような、しなやかに気品溢れる伸びやかさを持っており、そこには農村女性の持つ、働き者で揺るがない美しさを描く優しい世界があった。この地に育った妻への透徹した愛の深さが、横光にこの風土に生きる女たちの真実を、発見させたのであろう。「夜の靴」の芯の通った女たちを、さらに緻密に確かに形象化したのが藤沢周平文学に登場する女たちである。

藤沢文学には、郷愁を呼んでやまない品格を備えた日本の女たちが生き生きと描き出されている。「物言いも立ち居もごく控え目、その美は内側からにじみ出てくるような」(三屋清左衛門残日録)、「抑制された意思が静かな光を沈め」(用心棒日月抄)、「身についた優雅な気品」(蝉しぐれ)をたたえた女たち。表立つ

ことをしない控え目な慎みに、凜とした清冽の精神性を漂わせた女たちは、みな果たすべき役割を全力で務め、立ち居振る舞いは雅びそのものである。そして時に「内側から射す羞恥心に照らされて、不本意にらしい表情」(刺客)を見せる女たちは、内に激しい情熱を抱く女たちでもあった。静かさの中に無限の切なさをたたえしっかりと自分を律することの出来る女、決してもたれかかり、甘ったれることなく、敬愛の念で堅く結ばれている男と女。ふるさとの原風景である澄んだ自然描写とともに、藤沢文学の魅力として心惹かれてやまない女人群像である。

自立できる技を持ち、しなやかに自分を律する女たちは、現在も地域の元気を支える原動力でもある。生活を支え家族の介護をしつつ、農業や観光に携わる。さらに、伝統芸能を継承することを通じ地域の仕組みづくりを担っている。東北一の広さを有する鶴岡市に、前回の選挙以来一人の女性市議もない不自然さを指摘されるがいつまでもそうであるはずがない。かつて異端と思われた稲舟のように、時代に立ち向かう批評精神に学びつつ、庄内の未来を切り開こうとしている現代の女たちに潜在する能力は十分に高い。

坂東眞理子氏の「女性の品格」がミリオンセラーを成しているが、その内容は身近に見る庄内の女性の誰かれの日常でもある。しなやかに、気品溢れる明るさをもつ庄内の女性のたくましい生活力と、静かな物腰を地域の底力として生かしつつ、生活の実質を豊かにしていく営みがある。母の声と背中の中温かさに、生きる知恵と勇気を学んだ土地柄を大切に、地域社会の再生を図りたい。北国の冬に静かに深く、智恵を蓄えた女たちの底力は、今、絆を深めつつ芽吹きの時を迎えようとしている。